



図212 遺跡の位置 1. 味方曾根下遺跡 2. 味方曾根上遺跡
地形図「弥彦」

味方曾根下遺跡 南区味方

遺跡は、中ノ口川と西川の間広がる平野の中央にあり、標高は約〇・六メートルである。

昭和四十二（一九六七）年、県営圃場整備事業で表土を二〇〜二五センチメートル削った場所から、土器の破片が散乱しているのが見つかった。味方村教育委員会が村民有志や中学生などの奉仕を得て、緊急発掘調査を実施した。三月の吹雪の中、わずか二日間の調査であったが、平野部における古代遺跡の発掘調査では最も早い時期の調査であった。当時は、古墳時代の遺跡と報告されていたが、現在は十世紀（平安時代）の遺跡とされている。



図213 昭和42年の発掘調査

いた。灰の層には、土器の破片や動物の骨が混じっていた。もう一棟は、南北三・二メートル、東西二・五メートルの長方形で、北西の角にかまどのような跡があったが、調査の前に削られ

この調査では、九〇平方メートルほどが発掘され、二棟の竪穴住居跡が見つかった。一棟は南北三・三メートル、東西二・五メートルの長方形で、住居の東南の角には、粘土で作られたかまどの跡があった。原形を失っていたが、灰や木炭が多量に堆積しており、かまどは赤く焼けて

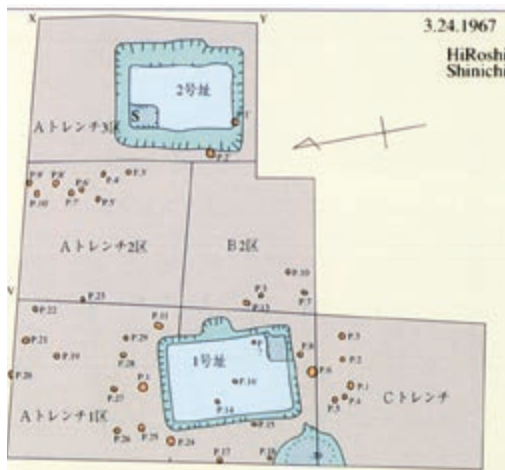


図214 当時の調査平面図 部分



図215 土師器の壺

遺跡のすぐ北側には、平安時代・中世の五之上曾根上遺跡（西蒲区）があるので、これと一体の集落であった可能性がある。

可能性がある。さらに、遺跡のすぐ北側には、平安時代・中世の五之上曾根上遺跡（西蒲区）があるので、これと一体の集落であった可能性がある。

てしまっていたため、かまど跡と断定することはできなかった。遺物のうち食器は、土師器の壺がほとんどで、水漏れを防ぐために内面に炭素を吸着させた黒色の壺もあった。須恵器の坏は稀であった。越後では十世紀になると、須恵器の食器よりも土師器の食器がよく使われることが、その後の研究で分かった。そのため、味方曾根下遺跡は十世紀の遺跡とされたのである。

また、越後の平野部では、九世紀半ば以降は掘立柱建物が普通で、竪穴住居はほとんど見られなくなる。そのため、二棟の竪穴住居跡は鍛冶工房などの特殊な建物だった